

『子どもたちは、今どのような地図指導を求めているか』

— アンケートの分析結果をめぐって —

東京学芸大学名誉教授 次山 信男

小学校（4～6年）の子どもたちが、地図や地図帳について抱えている実態を明らかにしようとする今回の調査は、広範囲から、しかも数多くのサンプルを収集して進められ、子どもと地図、子どもと地図帳、そして、その指導を考える上で多くの示唆を与えてくれるように思います。とりわけ、巷間賑わしている「学力低下論」や「基礎基本論」が、ややもすると子ども抜きで語られることが多い中で、注目すべき調査といえましょう。

以下、この調査のデータや調査者の分析のいくつかをめぐって、調査に現れた実態を、「指導を求める子どもたちの声」と受けとめて、思うところを述べてみることにします。

■ 「地図帳嫌い」に潜む、指導を求める子どもたちの声

まず、「地図好き」の子どもが、学年を追うごとに10%ダウンすることについて考えてみましょう。

ここで調査者は、全体として「地図好き」（地図帳好き）の子どもが50%を越えるという数値を予想外の好結果ととらえ、この数値に、子どもたちが「地図好き」になる可能性を積極的に見取ろうとしています。しかし、その一方で、4年の段階で62%ある数値が、学年ごとに約10%近くダウンし、6年では41%になるという問題を指摘しています。

「地図好き」の子どもが50%を越えるという数値をどのようにとらえるかは、事前に何を根拠にどの程度の数値を予測していたのかにかかわるのですが、ここでは地図を指導する側や地図を提供する側に、少なからず希望を持たせる数値として受け止めようとしているのです。ですから、それが学年を追うごとに約10%ダウンするという実態は看過できない問題なのです。

この問題を解く鍵の一つは、①「何が書いてあるのかわからない。使い方がわからない…40.9%」、②「探したり、調べたりするのが面倒くさい…32.8%」、③「字が小さくて見にくい…21.5%」という、「地図嫌い」、「地図帳嫌い」の子どもたちの声（叫び）に潜んでいるように思われます。もし、そうであ

るならば、①と②は指導の問題、③は編集の問題といえるでしょうか。

■ いつでも、どこでも、必要に応じて繰り返される指導を

調査者がいうように、「どのような情報が、どのようなしきみで編集されているのかが理解できるかどうかが、好き嫌いが発生する要因である」のですが、①と②では、「それをいつ、どのように指導するか」ということを、子どもたちから問われているのです。つまり、そのようなことは、多くの教室では地図帳指導の導入時に「地図のなりたちとしきみ（P.5～6）」や「わたしたちの県のようすを調べてみよう（P.7～8）」（いずれも帝国書院『小学生の地図帳』）のページで集中的に指導されているのでしょうかが、そうではなく、子どもたちが求めているのは、「いつでも、どこでも、必要に応じて繰り返される指導」のように思うのです。問題解決の過程で子どもたちが「探したり、調べたり」する時こそ、「どのような情報が、どのようなしきみで……」に立ち戻るという、指導の場がひらけるし、「面倒くさがる」子どもたちも、その指導の後押しを受けて立ち上がるのではないかでしょうか。

■ 3～4年用、5～6年用の地図帳が欲しい

また、子どもたちが手にする教科書類で、地図帳ほど細かな文字や記号で、しかも多くの情報が記載されているものはありません。ですから、③の「字が小さくて見にくい」ことについては、調査者も厳しく受けとめているように、提供する側が子どもたちの立場にたって改善していかなければならない問題でしょう。しかし、4年から6年まで一冊の地図帳で学習しなければならないという発行上の制約（文部科学省）も、子どもたちの「地図嫌い」の一因になっていることも確かなのです。文字の大きさをはじめ、内容・表現も発達段階や学習内容と無縁ではないのです。一日も早くこの制約がとかれ、3～4年用、5～6年用の地図帳が子どもたちの手元に届けられることを期

待したいのです。

■教材研究と活動研究のあり方の見直しを

もう一つの鍵は、教材研究と活動研究のあり方に潜んでいるのではないでしょうか。教室で学ぶ子どもたちの姿には、「地理は地図」、「歴史は年表」というような構えが、あたかもそれが当然であるかのようにみられます。これも日々の指導がそうさせてきているように思われるのです。ここでも、調査者が指摘しているように、歴史的な過程に「地図」を位置づけて地理的なひろがりを考えたり、地理的なひろがりやつながりに「年表」を関係づけて歴史をとらえたりすることを目指すならば、一概に「6年は歴史学習、だから地図は…」ということにはならないはずです。むしろ、自分たちの歴史の学びに必要な地図を求めようとする、本当に「地図好き」の子どもたちが現れてくるのではないでしょうか。

例えば、本調査における「都道府県名」の認知度の場合をみても、環境学習（琵琶湖）に結びつけて「滋賀県」を確かにしていく子どもたち、また、平和学習（原爆ドーム）に結びつけて「広島県」を確かにしていく子どもたちの姿が予想されていますが、その陰にも、この教材研究と活動研究を相互に関連させた指導がみえてくるのです。**指導の目標を吟味しつつ教材の内容や構成などを探る教材研究と同時に、子どもたちの動きを想定しながら活動の内容や設定方法などを探る活動研究を、相互に関連させながら深めていくことが求められている**ように思うのです。

■「教室から家庭へ」、「家庭から教室へ」の双方向から

次に、子どもたちの家庭における地図帳活用の実態から、地図指導をめぐる問題を考えてみたいと思います。

ここでも、調査者は、家庭で地図帳を活用すると回答した子どもが全体の50%であったことを予想外の好結果ととらえています。この数値は「地図好き」、「地図帳好き」の数値と全く重なるだけでなく、内容的にも「地図好き」、「地図帳好き」な子どもと、家庭において地図帳を活用する子どもとの重なり（「大好き…80%」、「好き…65%」）がみられるのです。これを調査者は当然のように教室での指導の成果であり、「教室の指導をますます充実させていくことにより、家庭でも自発的に地図帳を開く力を…」と指摘しています。

しかし、次のような子どもたちの家庭での地図帳活用の実態

からは、「教室から家庭へ」と同時に、「家庭から教室へ」という指導に求めるメッセージもみえてくるのです。ここでは「宿題や予習・復習のため…22.5%」はともかくとして、「遊びや旅行へ行くときの場所確認…24.3%」、「興味のある地域の場所や産物などを調べる…21.9%」、「TVや新聞ででてきた地名を探す…13.2%」など、**生活や楽しみに密着した活用の姿**がみられます。つまり、「これを『教室での学び』に積極的に活用していこう」という子どもたちからのメッセージです。これは「地図帳嫌い」と回答した子どもの中にも、わずかであるが家庭でも活用している実態があるということとも深くかかわっているのです。ここでは調査者も「この事実を根気よく掘り起こしていくことによって、地図帳が好きになる指導の手がかりがつかめるのでは…」と指摘しているのです。

地図帳を取り巻く子どもたちの生活には、地図帳を辞書や辞典・事典、時刻表などと同列にした活用や、日常の情報伝達の手段（コミュニケーション・ツール）とする実態がみられます。それは各家庭によってさまざまなのですが、それ故に、その実態を「**教室での学び**」に取り込んでいくという指導の積極さが求められているように思うのです。

■国語のノートに地図を描く子どもたち

それは、**教室での地図帳の活用を、社会科以外の教科や領域へ広げていく契機にもなるのではないでしょうか**。最後に、私の経験を一つ挙げて、話を締めくくりたいと思います。

附属小学校の校長をしていた時のことです。5年生の教室で国語の読解の研究授業が進められていました。教科書にある『紅鯉』という作品（丘修三作）を深く読んでいくという学習です。子どもたちは、川の中にいる見えない鯉を追っていく主人公の気持ちの変化を読み取るのに、ずいぶん手間取っていました。授業後の研究会で「川の中にいる見えない鯉を追っていく場面を地図に描いてみてはどうだろう」と提案してみました。町外れ、用水路、せき、たんぼ、町中、川、支流…という場面を地図に描いてその状況をつかんでみるわけです。そうすることによって**主人公の動きが地図の広がりの中で、しかも場面に即してイメージされるのではないか**と思ったからです。翌日の教室では、文章に即して国語のノートに地図を描いて考えていく子どもたちの姿がみられたのです。